

サミュエル・ウィスカーズの話

もしくは、うずまきプディング



ビアトリクス・ポター さく・え

たちばな こうじ やく







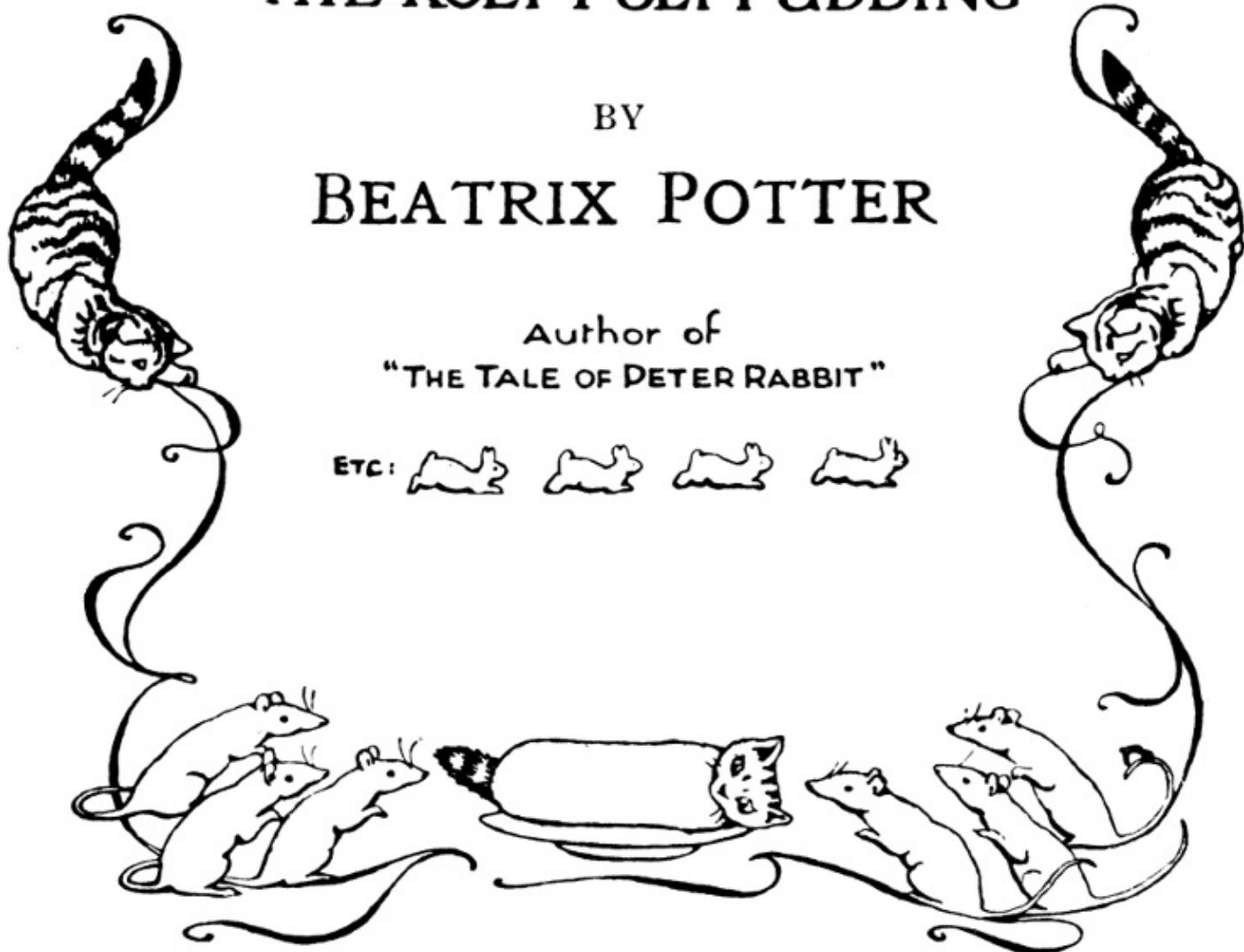
THE TALE OF SAMUEL WHISKERS

OR
THE ROLY-POLY PUDDING

BY
BEATRIX POTTER

Author of
"THE TALE OF PETER RABBIT"

ETC: 

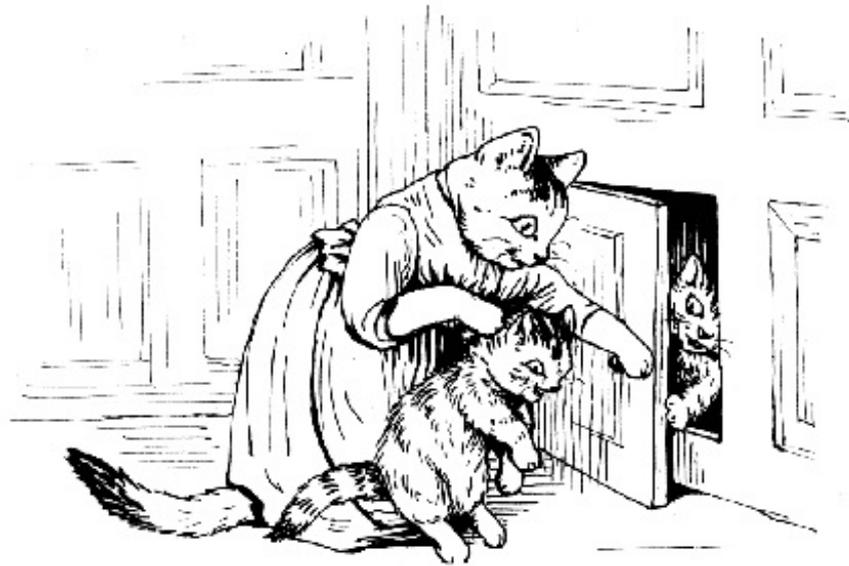


FREDERICK WARNE

利口なピンクの目をした
嫌われものの（でも元気っぱいの）種族を代表する
人なつこい小さな友だちにして
凄腕のぬすっとたる、
「サミー」をしのんで







むかしむかし、タビサ・トイッチト夫人という、かあさんねこがいた。
悩める親猫だった。

子ねこたちときたら、しょっちゅう母親の目をぬすんでは、見ていないところでいた
ずらばかりしてたのさ！

ある日パンを焼くあいだ、タビサは子ねこたちを押し入れに閉じこめることにした。
モペットとミトonzはつかまえた。でもトムが見つからない。





タビサかあさんは、トムを呼びながら家じゅうを行ったり来たりした。階段下の食料庫ものぞいたし、いちばん上等のお客さん用の寝室を、埃よけにかけてある布の下までくまなく探した。最上階まであがって屋根裏部屋も見たけれど、トムはどこにもいなかった。

そこは押し入れや廊下がいっぱいある、古いふるーい家だった。壁はところどころ厚さが4フィートもあって、中でよくおかしい物音がしていた。まるで、小さな秘密の階段でもあるみたいに。

じっさい、羽目板にはがたがたしたへんてこな形の穴があいていたし、夜の間にも物が消えたりもしたんだ — とりわけチーズとかベーコンとかが。

タビサかあさんは心配で心配でたまらなくなってきた、トムを呼んで激しく鳴きたてた。



母猫が家じゅうを探しまわっている間に、モペットとミトonzはいたずらを始めていた。

押し入れの戸には鍵がかかっていなかったから、押し開けて外に出て行ったんだ。



子ねこたちはまっしぐらに、寝かせてあったパン生地に近づいた。生地はひらたいはちに入って、暖炉の前に置かれてた。

そいつを小さなやわらかい前足でぽふぽふ叩いて — 「ちっちゃくてかわいいマフィンつくろ？」

と、ミトonzがモペットに言った。



ところがちょうどその時、誰かが玄関の戸を叩いたもので、びっくりしたモペットは、粉の樽にとびこんだ。



ミトonzは牛乳置き場に逃げこんで、ミルクばちが並んだ石棚の上の、空っぽのつぼの中にかくれた。





やってきたのはお隣のリビー奥さんだった。パン種を少し分けてもらいに来たんだ。タビサかあさんが、なきじゃくりながら階段を下りてきて — 「入って、いとこのリビー、入って座ってちょうだい！ 泣きたいくらい困ったことになってるのよ、リビーさん」

涙にくれてそう言った。

「かわいい息子のトーマスがないの。どぶねずみに捕まったんじゃないかしら」

タビサはエプロンで涙をぬぐった。

「あなたのお坊ちゃんはいたずらものでしてよ、いとこのタビサ。この前こちらへお茶に呼ばれたとき、あの子あたくしのよそゆきのボンネットをゆりかごにしてふざけてたんですのよ。あなた、どこをお探しになって？」

「家じゅうぜんぶよ！ でもねずみが多すぎて。言うことをきかない子どもを持って大変だわ！」 と、タビサ・トイッチト夫人はなげいた。





「あたくしは、どぶねずみなどおそろしくなくてよ。あの子を探すのお手伝いしますし、おしおきするのもお手伝いしてよ！ あら、どうして炉がこいの中に煤が落ちてるんでしょう？」



「煙突を掃除しなきゃいけないの — まあたいへん、リビーさん — モペットとミトonzもどこかへいってしまってるわ！

あの子たちも押し入れから逃げてしまったんだわ！」





リビーとタビサは、もう一度、徹底的に家のなかを搜索にかかった。ベッドの下をリビーの傘でつついたり、戸だなを引っかけ回したり。ろうそくを持ち出して、屋根裏部屋にある長持ちの中まで見た。

何も見つけられなかったけれど、階下で一度、誰かがドアを閉めて走っていく音が聞こえた。

「ほらね、ねずみがうようよしてるの」

と、涙ながらにタビサ。

「私、台所の裏で、ひとつの穴から子ねずみを7匹も捕まえたのよ、そいつらは先週の土曜のばんごはんにしたわ。それから一度、じいさんねずみを見たことがあるの。すごく大きくて年とったねずみよ、リビーさん。私がとびかかろうとしたら、黄色い歯をむき出して、さっと穴の中にかくれてしまったの。

瘤に障るねずみたちよ、リビーさん」とタビサは言った。



リビーとタビサは、探して探しまわった。

二匹はそろって屋根裏部屋の床下から、何かをころころ転がす奇妙な物音がするのを聞いたけど、何も見あたりはしなかった。



二匹は台所に戻った。

「あなたのお子さん、少なくとも一匹ここにいらしてよ」

リビーがそう言って、モペットを粉の樽から引っ張り出した。



粉をはたきおとされ、床に下ろされたモペットは、ひどくおびえているようだった。

「あのね！ きいておかあさん」と、モペットは言った。

「おばあちゃんねずみが台所に来たの、そいで、パン生地を少しとってっちゃったの！」

二匹の猫は、生地を入れたはちを見にとんでいった。はたしてそこにはひっかいたような小さい指の跡があり、パン生地がひとつかみなくなっていた！

「そいつはどっちに逃げたの、モペット？」

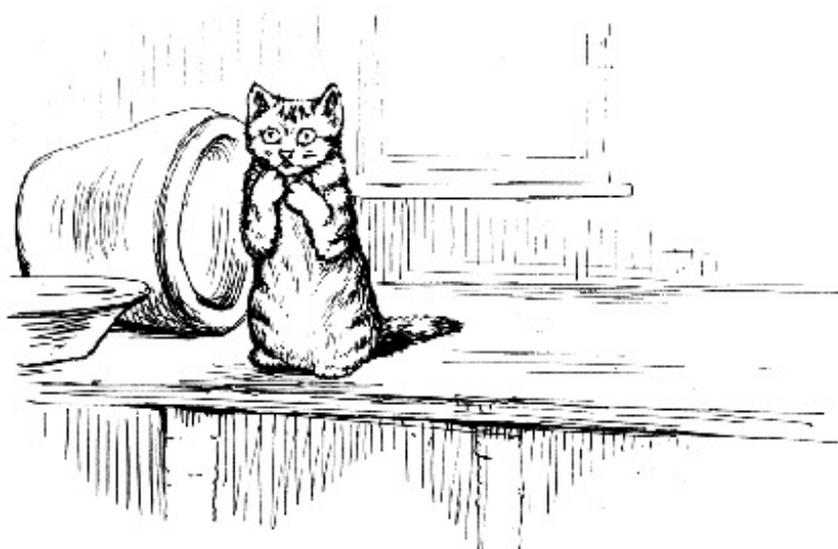
でもモペットは、こわくて二度と樽から外をのぞけなかったんだ。

リビーとタビサは、探し物をするあいだ、モペットを目の届くところに置くように、一緒につれていくことにした。

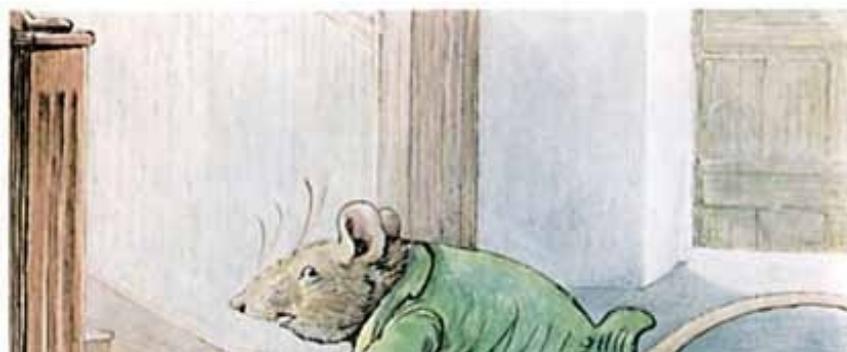


猫たちは牛乳置き場にむかった。

真っ先に見つけたのは、空のつぼの中にかくれていたミトンズだった。



つぼをかたむけると、転がり出たミトンズは、
「あのね、あのね、おかあさん！」としゃべりだしたー





「あのね！ あのね、おかあさん、おじいちゃんねずみが牛乳置き場に来てねーものすごく、おっきなねずみでね、おかあさん。そいつ、バターをひとつかけらと、のし棒を持っていっちゃった」

リビーとタビサはお互いを見やった。

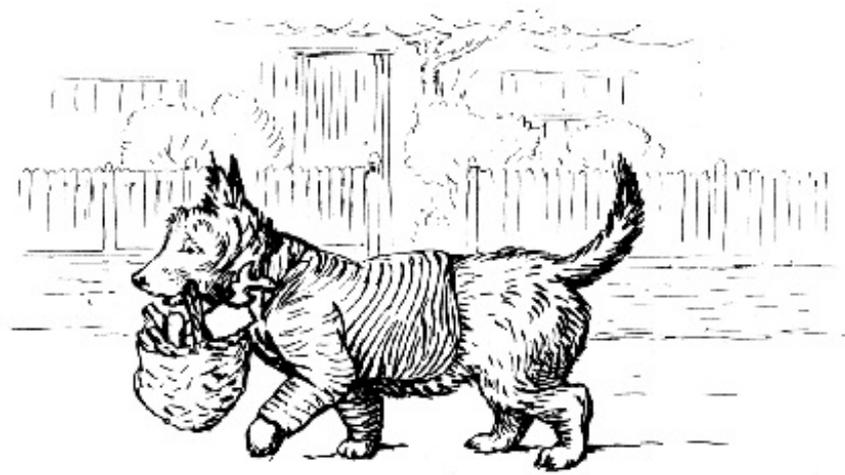
「のし棒とバター！ ああ、私のかわいそうなトーマス坊や！」

タビサが両手をもみしぼりながら叫んだ。

「のし棒ですって？」とリビーが言った。

「あたくしたち、何かをのすような音を聞いたんじゃないありませんこと？ 屋根裏部屋で長持ちをのぞいたときに」

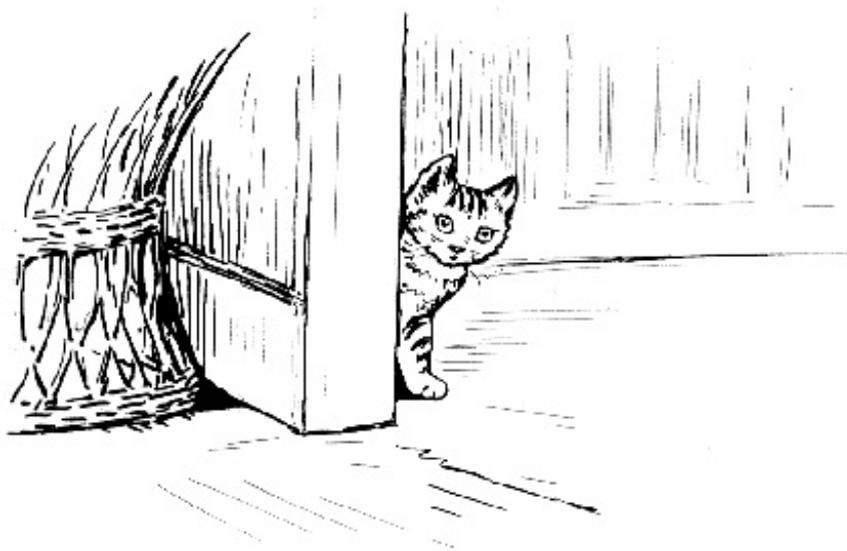
リビーとタビサは再び階段をかけあがった。するとはたせるかな、ころころいう音が、屋根裏の床下からまだはっきりと聞こえていたんだ。



「事は深刻でしてよ、タビサさん」とリビーは言った。

「左官屋のジョンを呼びにやらなくては。のこぎり持っておいでなさいって」

※



さてここからは、子ねこのトムがどんな目に遭っていたかのおはなしだ。これを聞けば、とても古い家の煙突をのぼることが、どんなにばかっているかわかるよ。そこが勝手のわからない場所で、おまけに大きなねずみどもがいるときはね。



子ねこのトムは、押し入れにとじこめられるなんてまっぴらだった。それで、母猫が

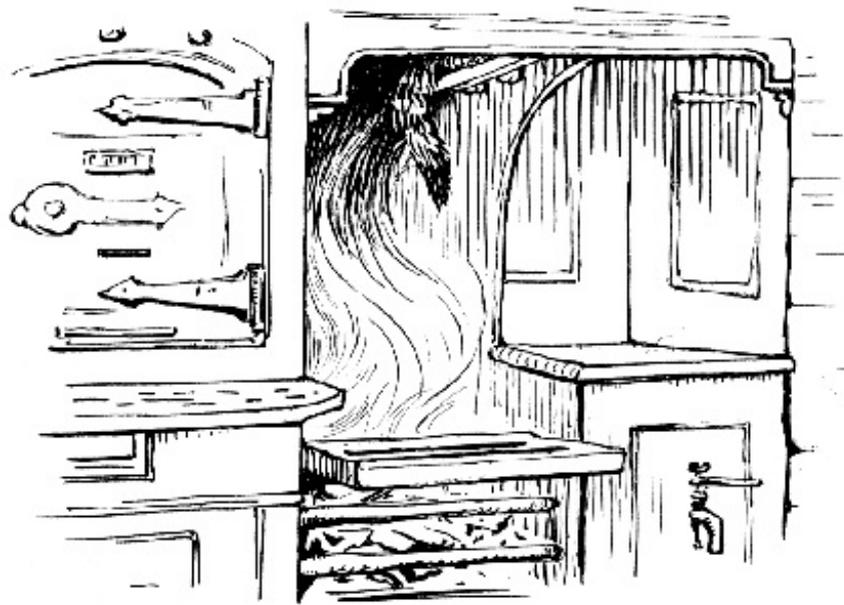
パンを焼こうとしているのに気づいて、隠れようとしたんだ。

ちょうどいい隠れ処を探して、煙突に目をつけた。

暖炉はまだ火がつけられたばかりで、熱くなかった。生がわきの薪から、白くていぶせっぽい煙があがっていたけどね。

トムは炉がこいにのぼって、上をのぞいた。大きくて旧式な暖炉だった。

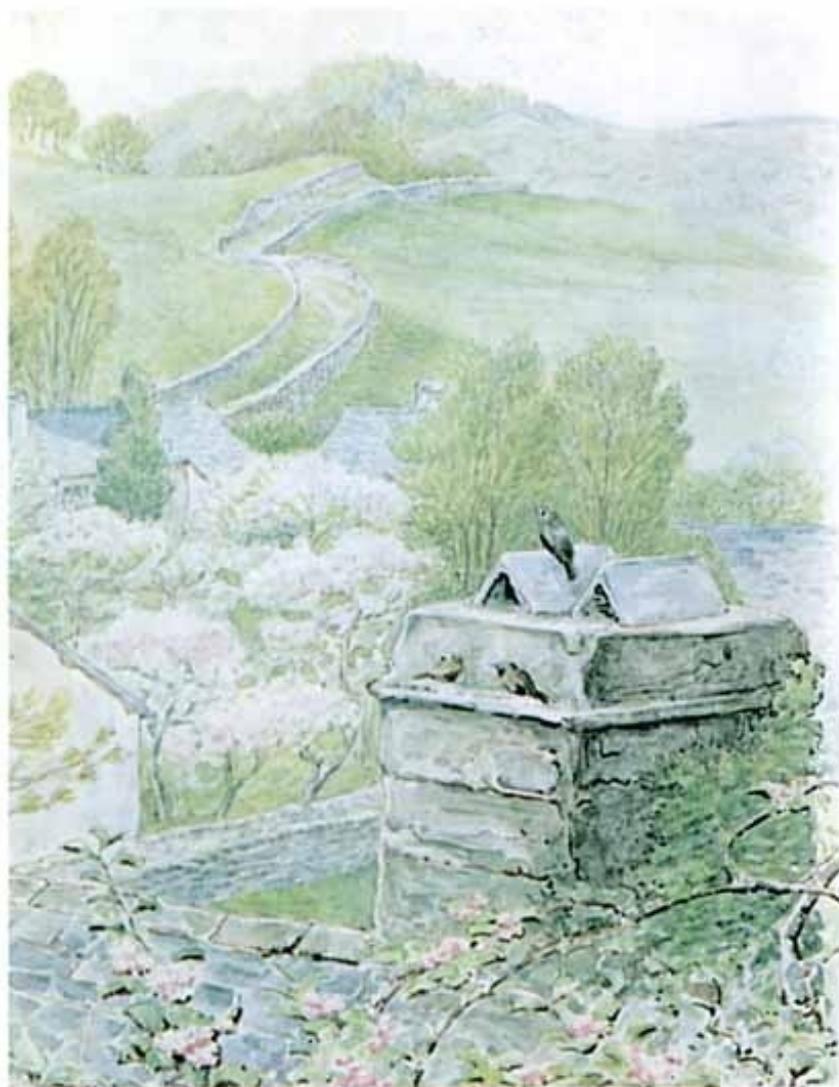
煙突そのものは、中で人ひとりが立って歩けるくらいの幅があったから、小さなトム坊やには十分な広さだった。



トムはかまどの真上に跳んで、やかんをかける鉄棒に、バランスよく飛び乗った。



お次は棒から大きく跳んで、煙突の内側の高いところにある出っ張りの上に飛び移った。そのとき炉がこいの中に煤を少し蹴落とした。



子ねこのトムが、煙にむせたり咳き込んだりしていると、下の暖炉で、薪がぱちぱち音を立てて燃えはじめたのが聞こえた。トムは腹をくくってずっと上までのぼって、屋根の上に出てスズメでもつかまえることにした。

「あともどりはできないぞ。足をすべらせたりしたら、火の中に落っこちて、ぼくの立派なしっぽと小さな青い上着をこがしちゃう」

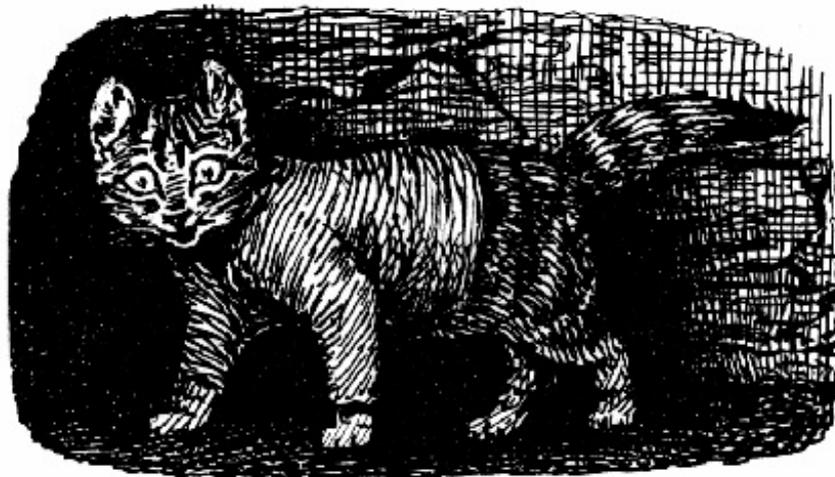
煙突は年代物でたいそう大きかった。人々が、炉床で丸太を燃やしていた時代に建てられたものだったんだ。

くみあわさった煙突のてっぺんは、小さな塔のように屋根の上にそびえ立ち、斜めにかぶせられた雨よけのスレートのすきまから、日の光がさしこんでいた。





子ねこのトムは、こわくてたまらなくなってきた！
ただただひたすら上へのぼった。



とちゅうで、煤が厚くつもった横道にもぐりこんで、小さな煙突掃除夫みたいにな
った。





あやめも分かぬ闇の中で、煙道はいくつもつながりあっているようだった。煙は少なくなったけれど、トムは自分がどこにいるのかすっかりわからなくなっていた。

しゃにむに上へとよじのぼっていくと、てっぺんに着く前に、誰かが壁石をずらしたすきまが見つかった。あたりには、羊の骨がちらばっている — 「へんなの」とトム。

「誰が煙突のこんな上までのぼって骨をかじったんだろ？ こんなところ来るんじゃないかった！ それになんておかしなにおいだろ？ ねずみのおいみただけど、ひどすぎるよ。くしゃみが出ちゃう」と子ねこのトムはつぶやいた。

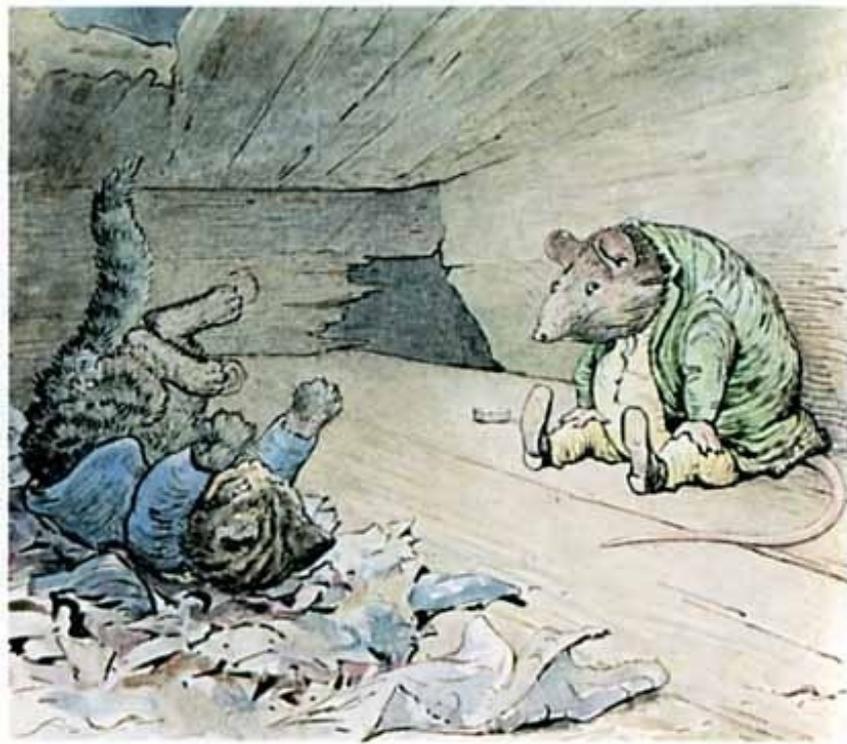


トムは壁のすきまにもぐりこみ、とてもととても狭っ苦しい通路をやっとの思いで進んでいった。通路には明かりはほとんどなかった。





数ヤードほど慎重に手探りで進んだ。そのときトムは、屋根裏部屋の幅木の裏側にいたんだ。絵の中で言うと、小さな*マークがついてるところだよ。



ふいにトムは、暗闇の中でもんどりうった。穴に落ちたんだ。まっさかさまに転がって、とても汚いぼろきれの山の上に落っこちた。

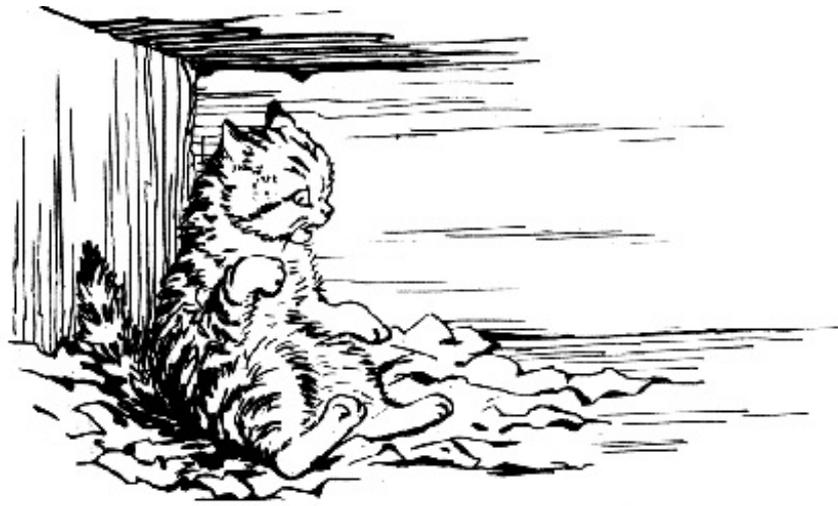
のろのろと起き上がってまわりを見回すと — そこは見たこともない場所だった。生まれてからずっと住んでいる家の中なのに。

とても狭くて風通しの悪い、かびくさい部屋で、板と垂木とくもの巣と木摺漆喰でできていた。

向かいには — いちばん離れた壁ぎわに — でっかいねずみが座ってた。

「煤まみれでわしのベッドに転がりこむとはどういうつもりじゃい？」

そのねずみは歯をかちかちさせて言った。



「えっと、あの、煙突そうじをしてて」
と、あわれなトムは答えた。



「アナ・マリアや！ アナ・マリアや！」
ねずみが叫んだ。
パタパタいう足音がして、ばあさんねずみが垂木のかげから顔を突き出した。





あつというまもなく彼女はトムにとびかかった。そしてトムは何がなにやらわからずにいるうちに —

上着をはぎとられ、小包のように丸められ、ひもで固くくくられてしまったんだ。

しばったのはアナ・マリアで、じいさんねずみは、かぎたばこをやりながらそれを見ていた。

しばりおえると、二匹ともすわって、口を開けてトムを見つめた。

「アナ・マリアや」と、じいさんねずみが言った。（名前はサミュエル・ウィスカーズというんだ） — 「アナ・マリア、わしの晩飯は、子ねこ団子のうずまきプディングにしとくれや」

「パン生地と、バターがひとかけいりますねえ。それとのし棒も」

アナ・マリアは首をかしげ、子ねこのトムを思案げに見つめて言った。



「いんや」と、サミュエル・ウィスカーズ。

「ひとつ本格的にやとくれ、アナ・マリア、パン粉をつけてな」



「ばかおっしやい！ バターとパン生地でたくさん」

とアナ・マリアは返した。

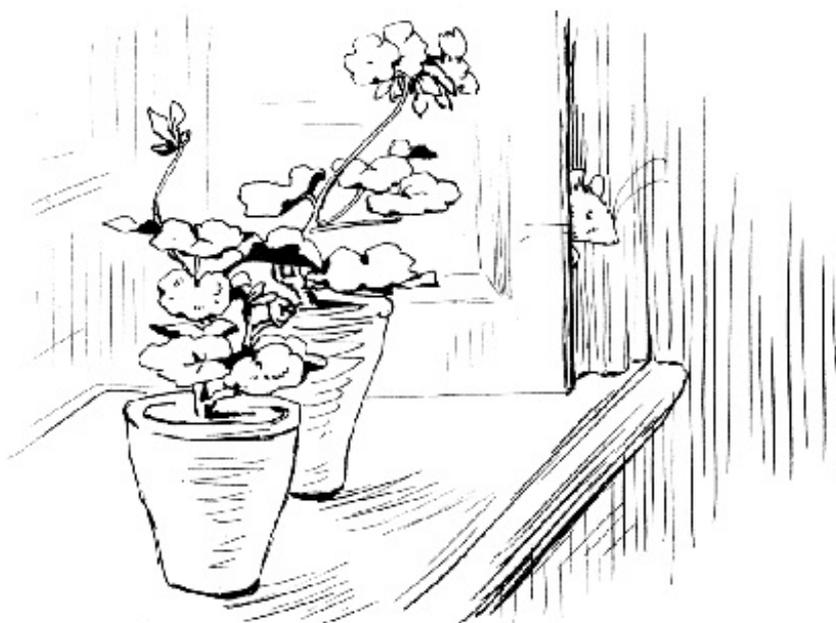


二匹のねずみたちは、しばらく相談しあってから出て行った。

サミュエル・ウィスカーズは羽目板の穴をとおり、大胆にも正面階段をおりて、牛乳置き場からバターを取ってきた。誰とも出くわさずに。

それから、のし棒を取りに二度目の遠征に出かけ、酒屋さんがビヤ樽を転がすみたいに前足で押して運んできた。

リビーとタビサの話し声がしていたけれど、彼女たちは長持ちの中をろうそくで照らしてのぞきこむのに気を取られていたので、見つかりはしなかった。



アナ・マリアは、羽目板と窓の罫戸をつたいおりて、台所へパン生地をぬすみにいった。



彼女は小皿を一枚しっけいし、両手で生地をつかみとった。
モペットがいることには気がつかなかった。



さて、屋根裏部屋の床下にとりのこされた子ねこのトムは、体をくねらせ、鳴いて助けを呼ぼうとしたよ。

けれども口の中は煤とクモの巣でいっぱいだったし、とても固くしぼりあげられていて、誰かに聞こえるような声が出せなかった。

一匹のクモが、天井のすきまから降りてきて、はなれたところから結び目を批評するように見ている。けど、クモは不運な青バエをしぼりあげている習性上、結び方にうるさかっただけで、トムに救いの手をさしのべようなんて気はなかったのさ。

トムは身をよじったりもがいたりして、すっかり疲れはててしまった。



まもなくねずみたちは戻ってきて、トムを団子にする作業にとりかかった。まずバターを塗りたくり、それからパン生地でくるみこんだ。

「このひもは、消化に悪くないかね、アナ・マリアや」

サミュエル・ウィスカースがたずねた。



そんなのは何でもありませんとアナ・マリアは言っていた。それより、生地がくずれてしまうから、トムの頭をじっとさせておきたかったんだ。彼女はトムの耳をつかまえて押さえこんだ。





トムは歯を鳴らしつばを吐き、みゃあみゃあ鳴いてもがいた。ねずみたちが両端を持ったのし棒が、ごーろごろごーろごろ転がった。

「しっぽがはみでとる！ パン生地が足りとらんぞ、アナ・マリア」

「これ以上は持ちきれなかったんですよ」 アナ・マリアが答えた。

「わしゃどうも」 — とサミュエル・ウィスカーズは手を止めて、トムに視線を送りながら言ったよ。 — 「わしにゃどうもこら、うまいプディングになりそうに思えんな。煤くさいわい」

アナ・マリアがそれに何か言い返そうとしたとき、突然上の方がさわがしくなっ
— のこぎりのこすれる音や、小犬の爪音や鳴き声が聞こえてきたんだ！



ねずみたちはのし棒を取り落として、耳をそばだてた。

「見つかった、じゃまが入ったわ、アナ・マリア。わしらの荷物をまとめて — 他の連中のもな — ただちに出発じゃ。

このプディングは置いていかにゃならんわい。

だがその結び目は消化不良を起こしとったにちがいあるまいて、お前がなんと言おうとな」



「とっとと行きますよ、ベッドカバーに羊の骨を包むのを手伝ってもらわなきゃ」とアナ・マリア。

「私は煙突に半分かくしておいたスモークハムを取ってきますんでね」



そんなわけで、左官屋のジョンが床板を持ち上げたときには — 床下には誰もいなくなっていた。のし棒と、とても汚い団子にくるまれた子ねこのトム以外はね！



でもあたりにはどぶねずみのおいがぷんぷんしていたから、左官屋のジョンは、午前中いっぱい、においをかいだりうなったり、しっぽを振ったり、頭を錐のように穴に突っ込んでぐるぐる回ったりして過ごした。



それからジョンは床板を再び釘で打ちつけて、道具をかばんにしまい、階下においていった。

猫の一家はすっかり落ち着きを取り戻し、夕飯までいてくださいと彼をさそった。

例の団子はトムからはがされ、煤の汚れ隠しに干しぶどうをまぜたプディングになってたよ。

トムは熱いお風呂に入れられて、バターを洗い落とされてた。

左官屋のジョンはプディングのにおいをかいたものの、残念ながら、食事に招かれている時間はなかった。ちょうどポターさんの手押し車を作り終えたばかりだったし、彼女からめんどり小屋をふたつ作る注文も受けていたんでね。





それから、午後遅くになって、私が郵便局に行こうとしたときのこと — 角のところで小道の方に目を向けると、サミュエル・ウィスカーズと彼の奥さんが走っていくのが見えたんだ、大きな荷物を小さな手押し車に乗せて。私のにすごくよく似た手押し車だったよ。

彼らはちょうど、農夫のポテトさんの納屋につづく木戸を曲がる場所だった。

サミュエル・ウィスカーズは息を切らしてあえぎ、アナ・マリアはまだきいきい声でなにやら言いたてていた。

彼女は勝手知ったる様子で、たくさんの荷物を運んでいた。

もちろんのこと、私は彼女に、手押し車を使っていいなんて言った覚えはないさ！



納屋にはいりこんだ彼らは、刈り取った干し草の上に、荷物をひもでつりあげた。





それからというもの、タビサ・トイッチトの家では、長い間ねずみが出ることはなかった。



農夫のポテトさんかというと、気がくるいそうになっていた。

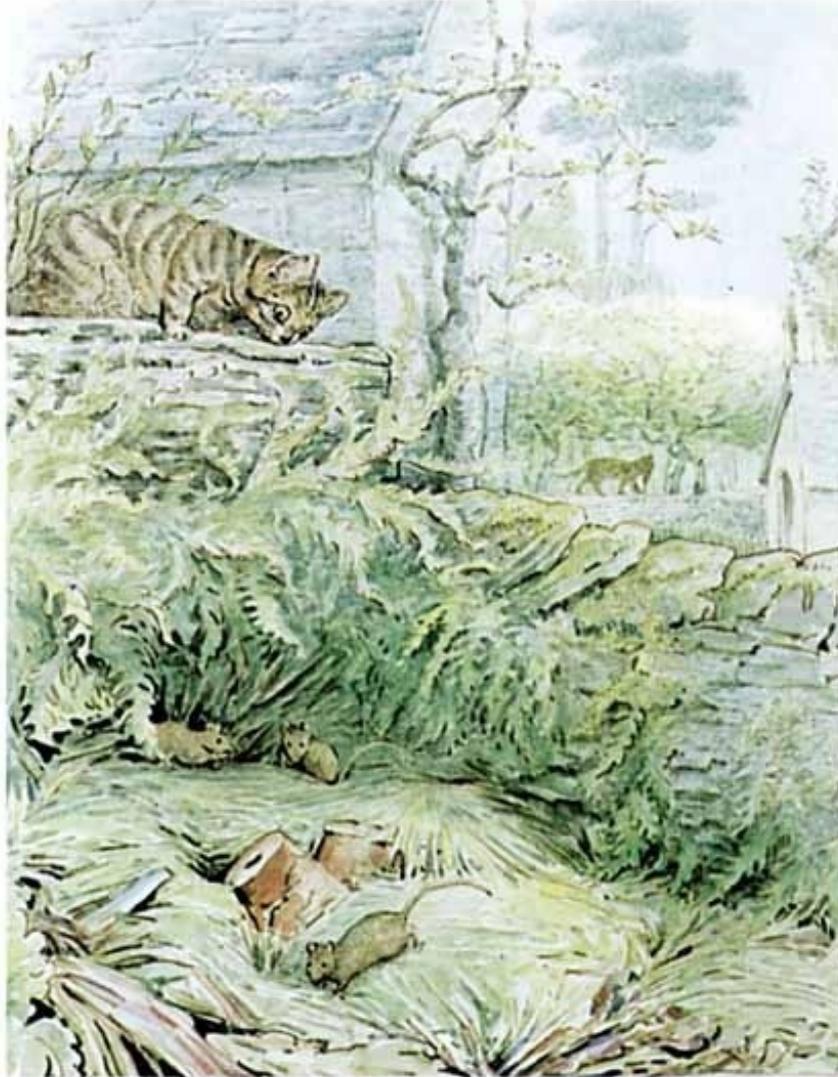
ねずみ、ねずみ、ねずみ、納屋じゅうねずみだらけ！

にわたりのえさは食い尽くされるわ、からす麦やふすまは盗られるわ、挽き割りトウ

モロコシの袋には穴をあけられるわ。

そいつらみんな、サミュエル・ウィスカーズ夫妻の子孫たち — 子供の、子供の、そのまた子供。

どこまでいってもきりがないんだ！



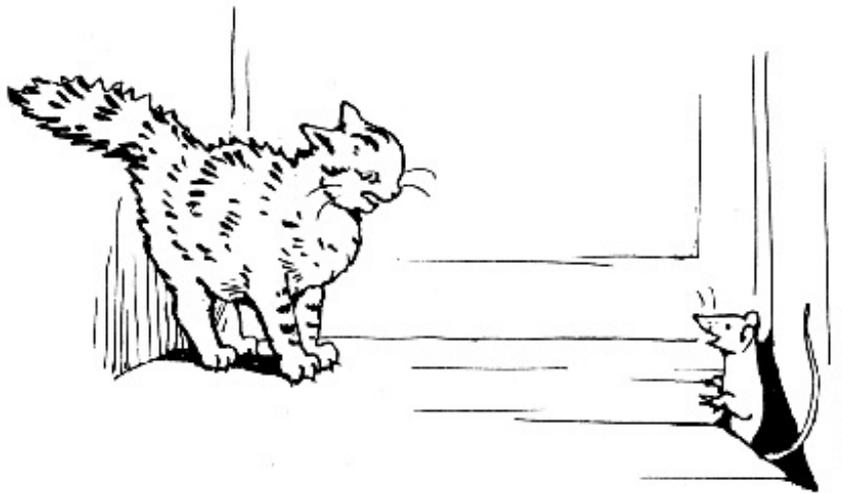
モペットとミトズは、長じてどぶねずみを獲るのがずいぶん達者になった。

ねずみ獲りに村へでかければ、仕事はやまほど見つかった。それでたくさん稼いだから、暮らしはだいぶ裕福だった。





つかまえたねずみのしっぽは、ずらっと納屋の戸につるした。何匹つかまえたかわかるように — いくつもいくつも。



だけど子ねこのトムは、いつまでたってもどぶねずみを怖がった。
敢然と立ち向かえたのは、ずっと小さな —



はつかねずみだけで。

おしまい



ポター作品リスト

Beatrix Potter作品の日本における著作権は消滅し、パブリックドメインに帰しています。
翻訳の底本はFREDERICK WARNE出版の The original and authorized edition です。

1. The Tale of Peter Rabbit (1902) 【[ピーターラビットの話](#) : 2012.3】
2. The Tale of Squirrel Nutkin (1903) 【[リスのナトキンの話](#) : 2012.3】
3. The Tailor of Gloucester (1903) 【[グロスターの仕立屋](#) : 2012.4】
4. The Tale of Benjamin Bunny (1904) 【[ベンジャミンバニーの話](#) : 2012.3】
5. The Tale of Two Bad Mice (1904) 【[二匹のいたずらねずみの話](#) : 2012.12】
6. The Tale of Mrs. Tiggly-Winkle (1905) 【[ティギーウィンクルさんの話](#) : 2012.5】
7. The Tale of the Pie and the Patty-Pan (1905) 【パイと焼き型の話 : 執筆中】
8. The Tale of Mr. Jeremy Fisher (1906) 【[ジェレミー・フィッシャー氏の話](#) : 2014.2】 **NEW**
9. The Story of A Fierce Bad Rabbit (1906) 【[あらくれやくざうさぎ物語](#) : 2012.12】
10. The Story of Miss Moppet (1906) 【[モペット嬢物語](#) : 2012.12】
11. The Tale of Tom Kitten (1907) 【子ねこのトムの話 : 執筆中】
12. The Tale of Jemima Puddle-Duck (1908)
13. The Tale of Samuel Whiskers or, The Roly-Poly Pudding (1908)
【[サミュエル・ウィスカーズの話](#) もしくは、[うずまきプディング](#) : 2013.4】
14. The Tale of the Flopsy Bunnies (1909) 【[フロプシーのちびっこたちの話](#) : 2012.4】
15. The Tale of Ginger and Pickles (1909) 【[ジンジャーとピクルズの話](#) : 2013.1】
16. The Tale of Mrs. Tittlemouse (1910)
17. The Tale of Timmy Tiptoes (1911)
18. The Tale of Mr. Tod (1912) 【[ミスタートッドの話](#) : 2012.11】
19. The Tale of Pigling Bland (1913) 【[ピグリブランドの話](#) : 2013.12】
20. Appley Daply's Nursery Rhymes (1917) 【[アプリィ・ダプリーの話](#) : 2012.4】
21. The Tale of Johnny Town-Mouse (1918)
22. Cecily Parsley's Nursery Rhymes (1922) 【[セシリ・パセリの話](#) : 2012.4】
23. The Tale of Little Pig Robinson (1930) 【[こぶたのロビンソンの話](#) : 執筆中】 **NEW**

原文参照

[Project Gutenberg : Books by Potter, Beatrix](#)

[Arthur's Classic Novels / Beatrix Potter](#)

サミュエル・ウィスカースの話 もしくは、うずまきプディング

<http://p.booklog.jp/book/64893>

作者：ピアトリクス・ポター

訳者：橘 柑子

作者プロフィール：<http://ja.wikipedia.org/wiki/ピアトリクス・ポター>

訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tokijikudou/profile>

感想は こちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64893>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64893>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ